童心慰問の旅

山内勇仙

この度、東京私立幼稚園聯盟の皇軍慰問使として、中支方面へ參りました。往復共僅かに三週間餘に過ぎませんので、大した慰問も出來ませんでしたが、編輯部の方から、何か寄稿せよとの事でしたから、童心的慰問として、この機會に保育に從事せらるゝ方々に御報告するのも一つの責務と存じまして、拙ない筆を執る事に致しました。御諒承下さい。

出發

東京私立幼稚園聯盟の幹事會で、皇軍慰問の件が決議されまして、各幼稚園々幼兒より一人十錢宛の醵金によつて、慰問品を購入し、更に自由畫、手技、寫眞等も贈る事、尙之を携行する慰問使も、現地に於いて、幼稚園に於けるありのまの童話、紙芝居、人形芝居を兵隊さん達にお目にかけたらと云ふ事になりました。勿論旅費は聯盟としては成立後間もない事でありますから支出の途なく、各自負擔であります。

結局、左の三名が參る事になり、役割も亦決りました。

童　話　鵜ノ木幼稚園長　加藤武夫

紙芝居　龜戸幼稚園長　山内勇仙

人形芝居　聖美幼稚園長　内山憲堂

他の方々はともかくも、私の役、紙芝居には何がいゝのか、ほと〳〵困つて了ひました。その中に庶務を引受けてゐる私の處へは慰問品として送られる各園からの手技や、醵金の受付事務、海軍省その他への打合等で、準備の日數が少ない爲に、相當多忙になりまして、紙芝居を考へる事も、描く事も出來なくなりました。幸に幹事會合の席上で、この苦衷を訴へますと、結局、全甲社の「鴨取り權兵衛がまづ纏つてゐていゝだらう」と云ふ事になり、それを又和田實先生が、御自分の經營の「養成所の生徒にかゝせるから」と引受けて下さいましたので、先づ先づ、ほつと胸を撫で下ろしました。それから、慰問品の購入、荷造り、發送等を濟ませると、自分の手廻り品はリックサックに積めこんで、愈〻出發の五月二十九日となりました。幸に紙芝居もモゾー紙一枚大に描かれて、前晩に屆けられましたが、おち〳〵見る事も、下稽古する暇もなくそのまゝ肩にかついで出かけました。

東京驛頭で賑やかなお見送りの萬歳と、日の丸の旗の波の裡に下關行の急行列車は西下致しました。三十日長崎着、三十一日午前十一時私共の乘船上海丸は長崎港を出帆、一路平安、六月一日午後二時上海の郵船碼頭へ横付けとなりました。尤も、楊子江へ近づくにつれて、海の色は黃濁となり、黃浦江へ入ると林立する御用船に日章旗が翻り、兩岸の家は燒落ちて、愈々戰地へ來たと云ふ感激に、船客一同は甲板に立ちよつて刻々近づく上海の風景に見とれました。

童心慰問

これから目的の童心慰問が始まるのでありますが、先づ、旗艦出雲へ支那方面艦隊司令長官をお訪ねして挨拶に參り、慰問品は目錄として呈出致しました。及川司令長官は私共を心よく引見され、溫顏に微笑を湛へて、勞苦を感謝されましたが、お話の中に、女高師附屬幼稚園の及川ふみ先生が長官の御令妹だとの事に驚き、出發前に先生の御手紙をお預りしてお屆けしたらさぞお喜びだつたらうと心中不束を詫びました。

今度の慰問は、海軍省副官の御高配により、慰問範圍も海軍關係を主とする事になつてゐましたから、出雪を辭すると、海軍特務機關へ參り、挨拶の後、持參した慰問品の分配、及び演技等の計畫順序を此處でして頂く事となつて居りました。それで萬事を御願ひして、更に陸戰隊本部へ挨拶に參りました。

愈々特務機關からスケヂュールが發表されて、左の處で、童心藝術?を演出致しました。

陸戰隊の中隊各所、軍艦朝日、航空隊、病院等でありました。始めは水兵さん達に小供臭い童話や、紙芝居、人形芝居は如何であらうかと一寸不安でありましたが、案ずるより產むが安く、案外に兵隊さん達を小供化して了ひました。全く兵隊さん達は純心であります。

それから、南京へ參りました。沿道の風景は日本のそれと殆んど違ひません。特に簑笠着けて田植をしてゐる田圃風景は內地そつくりであります。たゞ水牛が働らいてゐるのと、クリークが多くて例の支那式の石橋がかゝつてゐるのと、處々に高塔が聳えてゐるのが支那らしい風景であります。

南京でも海軍特務部の御高配で、航空隊、軍艦堅田、病院等を例の童心慰問で小供化しました。

南京は明の太祖が修築したと云はれる城壁延々十一里に亙つて圍まれた都城でありますが、黑煉瓦の壁間に所々雜草の垂れ下つてゐる樣は、國破在山河城春草本深の感を如實に深くしました。

又汽車にゆられて、歸途は蘇州へ寄りました。マルコポーロが曾つて「天に天堂あり、地に蘇州あり」と云つたそうですが、戰火の跡もなくて、至極平和な街であります。此處では兵站部と野戰病院で慰問。宣撫班で支那小學校四五ヶ所を豫定してありましたが、日を延ばす事が出來ませんので殘念ながら割愛して上海へ歸り、更に杭州へ參りました。

幸にも私の同窓の友が副官をしておりましたのが、驛まで迎へてくれました。そして、その配慮で、四ヶ所の慰問と、

支那小學校で一回いたしました。

杭州は史に景に富む處で、わけても西湖の美は吉今から讃へられております通り、漫々たる水波、蘇堤、白堤の翠柳、周圍の山影、塔影相映じて繪畫そのものであります。

杭州は錢塘江に臨んでおりますが、この江の對岸にはまだ敗殘兵がトーチカなどを構築して頑張つております。

錢塘江は潮流で學問上名高い河でありますが、この江の注ぐ處は杭州灣で、昨年十月五日の皇軍敵前上陸地として私共には記憶に新らしい處であります。

皇軍の辛勞

これでもう豫定の日が過ぎました。六月一日上海へ上陸して以來十六日間、愈〻十七日の船で懐しの日本へ歸るべく再び汽車で上海へ向ひました。大陸も雨期に入つて霖雨が續いて居ます。この雨の爲、所に依つてはクリークの水が溢れて、水田も見渡す限りの黄濁の海となつて居ります。新聞で知つた黄河の決潰もこんなものでないかと想像されます。而も鐵道守備の兵隊さんは、雨中を歩哨に、荷役に働らいて居られます光景を見ると、全く心から感謝せずには居られません。

汽車が上海の北停車場へ止まりました。南京行杭州行共に此處から乘り降りするのでありますから四回この停車場に來て廢墟に齊しい附近の景を眼にしました。

此處は皇軍苦戰の閘北の地であり、北停車場はその中心をなすものであります。頑敵云々と當時は新聞にも報ぜられて、八月十四日から十月二十七日まで、……大場鎮の陷落するまでは退却しなかつた處だけに、上海戰線の代表的苦戰場とも云へませう。私達はこの停車場へ來る毎に、往時の苦鬪を偲びました。八階の廣壯な鐵路管理局の建物(支那軍の司令所となつた處)商務印書館(抗日書籍の發行された印刷工場)その附近のトーチカ、塹壕の跡を見て、加何に支那兵が抗日意識

に燃へて抵抗したか、これを攻撃する我が皇軍將士の如何に勇猛に奮鬪せられたか。今は爆彈や砲彈に破壞され、燒け落されて、無慘の殘骸をさらしてゐる廢墟の樣に心意自ら緊張するのを覺えました。

皇師百萬、聖戰に從事して、長期抗戰の唱へられる今日、目のあたりこの現景を見た私達は、必ず內地の皆樣にも出來る限りお傳へして、銃後の護りを固くしたいと思ひました。

歸着

六月十七日、長い間尊い體驗を得た大陸の地に別を告げて、乘船長崎丸は黃濁の楊子江を下りました。

越えて六月二十日、豫定の如く私達の「富士」は午後三時三十五分東京驛へ辷りこみました。

御出迎への方々、わけても可愛い我が園兒達の「園長先生、お歸りなさい」に眼底に熱いものが流れました。